

# 草のみどり

Kusa no Midori



特 集

司法試験合格祝賀会

国家公務員採用総合職試験合格祝賀会

FRONT LINE | 法学部

法学部で輝く！ わたしたちのキャンパスライフ



FACULTY OF GLOBAL MANAGEMENT

# 世界を人に動かす Vol. 35

企業経営とグローバル経済の先端知識、優れたコミュニケーション能力を養うべく、国際経営学部生は前進を続けています。



## 挑戦し続けることで得られたもの — 人とのつながりを通じて —

国際経営学部国際経営学科2年  
私立中央大学杉並高等学校(東京都)出身

内藤 萌香

でのインターンシップへの参加です。これら二つの経験を通して私が何を感じ、どのような学びを得られたのかについてお伝えしたいと思います。

### 学生団体で副代表に挑戦

将来は英語を使ってさまざまな国籍の人とかかわる仕事がしたいと考えていた高校時代の私は、多くの授業が英語で行われる国際経営学部の魅力を感じ、この学部を選びました。

私が自分の中で大切にしていること、それは「やらずに後悔するよりやってみる」後悔したほうがいい、だからまずは何事にも挑戦してみる」ということです。国際経営学部に入學した後、まずはやってみる」ということを意識して、大学2年生の現在までさまざまなことにチャレンジしてきました。

そして大学に入學したばかりの1年生の春、私は国際交流や留学相談のイベントを学部生に提供する学生団体「G・A・C・E」に加入しました。この団体に入った理由は、異文化交流や留学にもともと興味があったことに加え、大学生になって何か新しいことに挑戦したいという思いが強かったからです。そして2年生になった春、先輩から推薦いただき「せっかくのチャンスだから挑戦してみよう！」と思い、副代表としての活動をスタートさせました。

### 幹部としての活動の難しさとそこから得た気づき

半年間、副代表として活動する中で、組織を運営することの難しさを日々実感しています。その過程で学んだことが一つあります。それは、組織をうまく運営していくためには、一人ひとりの性格や得意・不得意を理解し、尊重することが何より大切だということです。たとえば、イベントを企画・運営する過程ではメンバーのモチベーションをどう保つか、どのように役割分担をすべきかなど、個人のやりたいことや考え方が違うからこそぶつかる壁がたくさんありました。全員を一つにまとめ、学生団体として活動していくことは想像よりも繊細で難しさを感じています。その過程で私が気づいたのは、「人数も多く多様な人が集まるからこそ、それぞれの意見を尊重して寄り添うことが何よりも重要だ」ということです。誰かを置き去りにしたまま

までは、良い団体も魅力的な企画も生まれません。そのために、現在一人ひとりととの面談の時間を設けるなど、意見や考え方に丁寧に向き合うよう心がけています。これからも活動を通して得た気づきを実践に生かし、メンバーに寄り添いながらまとまりのある団体づくりをめざしていきます。



4月に開催した代代木公園でのピクニックイベント “Meet Up”

### 大学2年生の夏

### インド・ベンガルールでのインターンシップに挑戦

まずはやってみる精神」を持ち続けている私は、学生団体以外にも「20





インドの伝統衣装“サリー”を女性が会社に着てくる“サリーデー”では私も実際に着てみました！



オフィスでは上司の方とお昼ご飯をシェアしながら食べていました



最終日に行ったプレゼンテーションはとても緊張しました

インドインターンシップ中に出会った現地の方との交流を通して、私は異文化を理解し、尊重することの重要性を学びました。このことを強く実感したのは、インド人の上司の方と会社で食事を取っていた時です。インドには食事の際や握手をする時など生活の節々において右手のみを使うという文化があり、さらに食事の際には基本的に手で食べ物を食べます。日本人の私にとってはなじみのないことだった

## 異文化環境に身を置く中で学んだこと

せっかくインドに行くなら現地の企業で働きたいと考え、AIテクノロジー関連製品を手がけるスタートアップ企業を選びました。インターンシップ先では製品が中国市場で持つ可能性についてマーケティング調査を通じてまとめ、最終的には全社員の方の前でプレゼンテーションを行いました。

歳になる前に何か大きなことに挑戦したい」と思い立ち、「インドのシリコンバレー」と呼ばれるベンガルールの1カ月間のインターンシップに参加しました。

め、最初は箸やスプーンも使わず、片手のみでご飯を食べることに抵抗がありました。しかし、ここはインドなのだからインドの文化に合わせてみようと思い、右手だけを使ってカレーを器用に食べ終えた時に、上司の方がすごく喜んでくれたことを今でも鮮明に覚えています。その上司の方はその後、会社が休みの日にも私をさまざまな場所に連れて行ってくださり、素敵な思い出をたくさん作ることができました。このように、異なる文化を受け入れた時にその文化を持つ人との心の距離がぐっと近づいた経験から、相手の文化を「受け入れてみる姿勢」の大切さを強く実感しました。そして、結果的にその文化を完全に理解できなくても、相手の文化を尊重する姿勢が異文化環境で信頼関係を築くための第一歩になると学びました。

## 二つの挑戦から学んだ、私がこれからの人生で大切にしたいこと

「何事にもまずは挑戦してみる」とを大事にしてきたことで経験できた、学生団体での副代表としての活動とイ

## 国際経営学部だより

# データサイエンスで世界を読み取るトランスレーショナル人材の育成

きゅうとく やすし  
久徳 康史 国際経営学部教授

今年度、研究開発機構からデータサイエンス分野の教員として国際経営学部に着任しました。

これまで理工学部の学生に、実際の調査データを解析・プレゼンテーションをしてもらうアクティブラーニングが中心の講義をしてきましたが、国際経営学部では座学中心で統計講義をしています。学生にとって統計学は初めて接する内容が多く、数式や抽象的な概念に戸惑う姿も見られました。そのため、消費者調査やマーケティング調査で数字が意思決定や企業活動と直結している実体験も紹介しました。学修到達度を振り返ると理解の深まりは確認できた一方で、学生の声を聞くと実感が伴わない様子が見受けられ、私自身の経験不足や指導法の改善点も痛感し、教育者としてのやりがいと課題を感じています。

初年度のゼミでは、実験心理学と心理測定学、

調査計画、統計学を習得し、消費者や就業者の心理を実験・調査で共同研究企業の方々と共に検証することをめざしています。当初は不安そうだった学生たちも、議論を重ねるうちに互いを尊重し合い、独自の意見を交わすようになってきました。まだ試行錯誤の段階ですが、その真剣な姿勢に私自身が刺激を受ける場面も多く、今後共に成長できることを楽しみにしています。

データサイエンスや統計学は単なる計算技術ではなく、社会現象を理解し合理的な意思決定を支える不可欠な学問です。経営では感覚や経験に加え、データに基づく分析こそが競争力を生みます。私は、統計を「難解な数式」ではなく「世界を読み解く道具」として捉え、それを専門外の人にも伝えられるトランスレーショナル人材へと成長できるように、学生を指導していきたいと考えています。



インドインターンシップという二つの大きな挑戦から、私は共通して「人とのつながり」と「他者を尊重する姿勢」の大切さを学びました。副代表として活動する中ではメンバーに寄り添いながら、一人ひとりの考えを尊重することが団体運営において何より大切だと気づきました。また、インドインターン

シップでは相手の文化に配慮し、出会った人とのつながりを大切にしたい。この経験は私の人生においてかけがえのないものになりました。これらの経験から得られた学びを活かし、これからの大学生活でも、人とのつながりを大切にしながら前向きに挑戦し続けたいと思います。